

浄

monthly
JŌDO

土



1999

9

September



テレコムしよう。



コミュニケーションの未来へ
日本テレコム

お申し込み、お問い合わせは
お客様センターへどうぞ



0088-82 (無料)

(受付時間) 9:00~23:00 (年中無休)

(インターネットホームページ) <http://www.japan-telecom.co.jp/service/>

国際電話は**0041**、市外電話は**0088**でテレコムしよう。

圓光寺

盛岡

寺院紀行

寺に歴史あり。
人々に信仰あり。
日本の、心の故郷を紀行する。

合唱造りの圓光寺本堂。
左右は市の天然記念樹、
夫婦桂



総代さんに囲まれる圓光寺第三十一世
加藤光順住禪と第三十二世加藤順庭上人







観音堂に祀られている
寺宝の生目観音像

圓光寺の歴史を伝える首
塚の石碑（右）と観音堂



江戸時代の洋画家亜欧堂田
善の弟子、田騏作の「少女
愛犬図」。貴重な寺宝だ



船橋八景に数えられる圓光
寺の晩鐘。鐘は三代目だ

盛岡 圓光寺

大広間は百八畳。奥は
舞台になっている



船ッコ流しと呼ばれる先祖供養の
お盆の伝統行事が圓光寺本堂にも
船ッコが飾られ北上川に流される



米内家と米内光政の墓



圓光寺第三十一世加藤光順住職

浄土

1999/9月号 目次

カラーグラビア寺院紀行「盛岡・圓光寺」	写真＝タカオカ邦彦	3
日本史上の法然上人（二）	大隅和雄	8
連載小説 法然上人をめぐる人々（五）	石丸晶子	14
表紙の言葉	三浦功大	21
寺院紀行「盛岡・圓光寺」	真山 剛	22
御法語に聞く	袖山榮輝	32
東海道五十三次を歩いて（五）	原田 功	36
仏教歳時記		46
J フォーラム		47
浄土誌上句会	選者＝増田河郎子	50
まちがいさがし		53
編集後記		54



表紙題字＝浄土門主 中村康隆猥下
表紙撮影＝三浦功大
アートディレクション＝近藤十四郎
協力＝迦陵頻伽舎

日本

史

上
の

法然上人
(三)

大隅和雄

前回は、法然上人を、浄土宗の祖師としてだけではなく、日本人の信仰の歴史の中で逸することのできない、偉大な宗教者として考えるきっかけを作ったのは、明治時代のキリスト教の宣教師、牧師たちであり、そういう人たちの新しい見方が、鎌倉時代の仏教の動向を、歴史学の問題として取り上げられることを促し、日本歴史の教科書に、法然・親鸞・日蓮・栄西・道元などの名を、登場させるに至ったということを申し上げました。

そこで、日本歴史の中で、鎌倉時代の仏教がどのように考えられてきたのかを、見ておきたいと思います。江戸時代以来、日本の歴史は儒教のいろいろな学派、国学などの立場で書かれ、論議されていましたが、明治の半ば、十九世紀の末になると、欧米の歴史学の影響のもとに、アカデミックな近代の歴史学が誕生しました。イギリスやフランスの歴史書が、進取の気に富む人々の間で読まれましたが、大学を中心にした歴史学は、ドイツの歴史学の影響のもとで成立しました。

新しい立場の歴史学者たちは、日本歴史の特質を、西洋の歴史と比較する中で、明らかにして行こうとしました。ヨーロッパの中世社会の特色とされる封建制度が、日本の鎌倉時代にも見られ、封建的な主従制度が武家社会の基礎をなしていたという議論が、日本の歴史学の間で、重要な論点になったのはその代表的な例ですが、鎌倉時代につぎつぎに新しい宗派が誕生したという仏教界の動きも、ヨーロッパの宗教改革との比較を通じて、理解されるようになりました。

宗教改革の中で指導的な役割を果たしたルターやカルヴァンは、ローマ・カトリックの教義と、教会の活動に対して、激しい批判を浴びせましたが、西洋史の中では、プロテスタントは新教、カトリックは旧教と呼ばれましたから、鎌倉時代の仏教の動きも、新しく

開かれた六つの宗派を新仏教、南都北嶺を拠点とする既成の仏教を旧仏教と呼び、新旧両仏教の対立として説明されるようになりました。

カトリック教会は、何世紀にもわたる正統的な権威を背景に、ローマを頂点とする組織と制度を重んじ、儀式典礼に高い価値を認めてきましたが、それに対してプロテスタントの人々は、一人一人の信仰を重視して、伝統的な教会の権威を否定し、儀式典礼の価値を認めなかったというように、鎌倉新仏教も、旧仏教が重視する造寺、造仏よりも、信仰の対象として選んだ仏やお経に、深く帰依することが肝心であると説き、大規模な法会や複雑な加持祈禱の作法よりも、念仏、唱題、坐禅などの簡潔な実践を重んじたと説明されたわけです。

また、新教の牧師たちは、聖職者の権威を認めず、信者自身が聖書の中に信仰の拠り所を見出すべきことを説きましたが、新仏教の祖師たちも、在家の信者と交わって、その問ひかけに答え、宗教生活のあり方を懇切に教えたことなどが強調されました。鎌倉時代の仏教の動向は極めて複雑で、新しい宗派はさまざまな性格を持っていましたが、歴史の説明は、ヨーロッパの宗教改革と、鎌倉時代の仏教改革運動との間の、共通点を指摘して行くという方向で整理され、新仏教理解の枠組みが作られて行きました。

法然、日蓮が、ルター、カルヴァンに準えられ、旧仏教の律宗の活動が、イエズス会に對比されるというわけです。法然は、仏教革新運動の旗手ということになりました。鎌倉新仏教を、ヨーロッパの宗教改革と比較しようとすると、鎌倉新仏教の、浄土・法華・禅という三つの流れの中で、末代の凡夫悪人としての人間が、阿弥陀如来の絶大な慈悲によって救われるという浄土教が、キリスト教と最も比較し易い宗教だと考えられましたから、

阿弥陀如来の救いを信じて、新しい立場を開いた法然上人、師法然の教えに従って、信仰生活を純化して行った親鸞聖人が、新仏教を代表する宗教家として重んじられることになったのだと思います。

さらに、プロテスタントの教えが、近代的な市民の間に広まっていったように、新仏教諸宗は、武士や農民を組織して、教団を発展させて行きました。そこで、日本史における仏教の展開を、飛鳥・奈良時代の国家仏教、平安時代の貴族仏教、鎌倉時代に始まる民衆仏教へとこの筋道で説明することが一般になりました。高度な外来文化として受容された仏教は、鎌倉時代になって漸く民衆に受け入れられるようになり、そのことによって仏教の日本化が進んだという見方が広まったわけで、中学校・高等学校の教室での、鎌倉新仏教の説明は、そういう線で進められてきたわけです。

新仏教の先駆者となった法然上人は、五穀豊穰、玉体安穩の祈禱を受け持つ国家仏教、現世の福德を祈り、それが来世でも続くことを願う貴族仏教を批判し、末代の愚痴無知の凡夫が救われる道を求め続けたわけですが、新しい立場に到達するまでの道のりは、大変複雑なもので、国家仏教、貴族仏教を批判したのだから、つぎは民衆を救うための仏教だというような簡単なものではありませんでした。

そこで、少し民衆仏教ということばについて考えてみたいと思います。法然・親鸞・一遍・日蓮・栄西・道元という、六人の祖師によって開かれた六宗が、多くの民衆に教えを説き、集まってきた信者を組織して、教団を作るようになるのは、祖師の時代から何世紀も経ってからのことでした。明確に宗門としての体制を整えるようになるのは、室町時代に入ってからのことと考えられます。鎌倉時代に、祖師の周りに多くの信者が集まったこ

とはありましたが、それが教団としての組織を整えるまでには、複雑な過程をたどらなければなりません。

どの宗派も、宗派として発展し、大きな力を持つようになったのは、祖師の後を継ぐ優れた教団組織者のはたらしによる所が大きかったのですが、教団の組織者が多くの信者を集め、教団を組織して行くためには、祖師の教えを敷衍し、必要な場合には新しい解釈を加えて行くことも必要でした。鎌倉時代以降の、仏教史をたどって行くと、宗門の成立と展開の中で、祖師の教えの説き方が、変化して行くのを確かめることができます。

宗教改革として、新仏教を理解しようとした仏教史の研究者たちは、改革者としての祖師を大きく取上げ、理想化する傾向がありましたから、宗派を組発展させ、中興の祖と呼ばれるような教団組織者の功績は認めながらも、宗門の発展の中で、祖師の信仰が改変され、純粋な立場が後退したという説明をするのが普通になりました。

しかし、一般に広まっている仏教史の説明では、新仏教は民衆仏教であるとしてきたわけですから、新仏教が民衆の間に浸透し、広く民衆を組織することができるようになった時、祖師の教えを改変せざるを得なかったという説明は、祖師を民衆仏教の創唱者と考えることと矛盾していることになります。法然、親鸞、道元というような祖師の思想は、なぜ改変しなければ、広く民衆に受け入れられなかったのでしょうか。

日本の宗教史を見て行くと、幕末明治の時代に、民衆宗教と呼ばれる宗教がつぎつぎに誕生したことがわかりますが、その教祖のほとんどは民衆の中から出ていて、苦しい生活の極限状態の中で、神仏の声を聞くようになり、素朴なことばで神仏の声を伝えた人物でした。そして、その神仏のことばを信じる人々が増える中で、教祖が伝えた神仏のことば

をたくみに整理し、教義を編み出すことのできる組織者が現れた教団が、後の時代に残って行くというのが一般であったと思います。

『愚管抄』という鎌倉時代の初めに書かれた歴史書を見ると、ある下級公家の妻に、突然、後白河法皇の霊が取り憑き、後白河法皇のことばを次々に口走るの、それを信じた人々が大騒ぎをすることが書かれています。学問もなく知識も持たない庶民に、霊が取り憑いて事が始まり、そのことばを取り次ぎ、たくみな解釈を加える組織者が現れると、宗教教団が成立するというのが、現代でも広く見られる民衆宗教の成立過程なのです。鎌倉時代に、民衆仏教が生まれたとすると、そういう経過をたどるのが普通だったのではないのでしょうか。

そういうことを考えて、鎌倉新仏教の誕生の跡をたどって見ると、新仏教の祖師たちは、一遍を別にすれば、すべて、旧仏教の拠点であった比叡山に登って、仏教の教学を究めようとした当代第一級の知識人であり、自己の宗教体験と思索の跡を、高度な文章で表現することのできる学僧であったことに気づきます。従って、新仏教の祖師たちは、神がかりになつて感得したことを、素朴な日常のことばで語り続け、その体系化は側近に委ねるというような、民衆宗教の教祖とは全く違って、自己の体験と思索を、思想として高め、仏教の教義として体系化した学僧であつたといわなければなりません。

比叡山で智恵第一といわれた法然上人は、三十年もの間、専門的で難解な教義の問題と取り組んでいたのですが、それは、平安時代の日本で、どういう意味を持っていたのでしょうか。法然上人は、どういう意味で民衆仏教の先駆者といえるのでしょうか。次回にそのことについて、考えてみたいと思います。

（東京女子大学文理学部教授）

「書きおろし連載小説」

石丸晶子

法然上人を
めぐる人々
式子内親王の生涯

第五回 女院と法親王、式子を見舞う

十

「齋院はご自身を何とお考えですか」
厳しさのこもる声で守覚はいった。

「民衆生であれば、法然房の教えに心を寄せられるのもよろしかろう。法然房もまた、民衆生のために、浄土の宗門を開いたときいている」

守覚は咳払いをして、

「しかし、姉上は内親王ではありませんか。さらに齋院に卜定された方ではありませんか。そのご身分というものを、少しはお考えなさるがよい」

深と張りつめた空気のなかに、男性としては澄んで、高音の守覚の声がひびいていった。声楽的にいうならば、彼の声は、バスではなくてテノールである。

「内親王には、民衆生にはない国家と天皇家に対する責務というものがあります。また、国家の繁栄と御代の安泰を、今上（当代の天

皇）の名代として神に祈るのが齋院というものの。わが身一つにかかずらわるのが、内親王の道でも、齋院の道でもありますまい」

守覚はつづけて、

「これゆえにこそ、齋宮や齋院を退下した皇女たちは、俗世に生きることなく、今度は仏道に帰依して、み仏の加護を国と天皇家の上に祈り求めてきたのです。親王に生まれた者の生涯とても同じこと。仁和寺もそのためにある」

守覚はことばを切ると、目を閉ざして彼のことばを聞いている式子に、ひたとまなざしをむけ、

「それに加えて齋院は、この度、東宮を猶子にという内々の御沙汰を、上皇さまから頂いておられるではありませんか。まことに齋院のお立場は、今後ますます重いいわなければなりません」

亮子と守覚が、大炊御門の邸に式子を見舞ったこの日から二十日ほど前のことである。

後鳥羽上皇の使者が邸を訪れ、土御門天皇六歳の弟宮で、五歳の東宮守成親王^{もりひさ}を、親王の大伯母式子の猶子にしたい、という上皇の内意を伝えてきたのだ。

ここに猶子というのは、実子でない子供をわが子として養育する、今のことばでいえば養子のことという。

地位や身分の高い者が「家」を存続させるために猶子を迎えたり、あるいは有力な後見人を失った子供を、官位の高い人間が猶子に迎えてその昇進を計ってやったり。当時の史料をみると、猶子の実態は複雑で、いまだ十分には解明されていない。

ただ天皇家周辺の猶子の事例をながめてみると、ある年令以上の独身の内親王たちが、天皇家の人々を猶子にしている例が多いのに気付かされる。

政治的には、そしてまた社会的にも、身分こそあれ内親王たちは無力であった。

だが彼女たちが、その両親から相続した財

産に、天皇家の他の人々が目をつけたのである。

式子の場合には、その父後白河法皇から遺贈されたいくつかの莊園と、優美かつ閑雅な邸として名高い大炊御門殿を所有していた。

十一

東宮に立つた五歳のわが子を式子の猶子に考えた後鳥羽の心には、このとき確かに、病篤い伯母式子が万一のとき、その遺産がどこにいくか、そのゆくえを考えるとところがあつたのは否めない。

社交ということをせず、夫もなく、もちろん子もなく、猶子というものも一人も持っていない式子の死後、その遺産はどこに散らばるのであろう。

亮子と守覚が分けるか、公卿御沙汰^{くぎょうごさた}（公卿社会の管理）とするか、それとも――。

そのときふと、守成^{もりひさ}を猶子にしよう、という考えが、後鳥羽の心に落ちてきたのである。

もつとも、そう考えたからといって、ただ欲得づく、なのではなかった。

そこには、同じく和歌をたしなみ、和歌に心を託しているもの同士としての親近感があったし、それに何よりも、数多いわが子のなかでももつとも深く愛している東宮守成を、伯母式子の猶子にすることで、この孤独な伯母の立場を高め、その身邊をにぎやかなものにしてやれる、という思いが、この時の後鳥羽の心をうしろめたいものにはさせていなかった。

その年のはじめである。実は後鳥羽天皇の妃で第一子土御門天皇の生母である承明門院在子が、内大臣源通親と密通していることが明らかにになったのである。

通親は在子を猶子として宮中に送りこんだ人で、したがってこれは、養父と猶子との密通事件でもあった。

かねてから上皇は、この在子よりも守成親王たちの母である修明門院藤原重子のほうを、

より多く愛していたのである。これを思えば在子の密通事件というのも、上皇の愛が他の女のほうにある淋しさが引き起こした事件であった、といえるかもしれない。

がともかく、この密通事件を契機にして、在子はいよいよ疎まれ、上皇の愛は一挙に、この重子のほうに深まることになった。

いきおい、帝位にある第一子とはいえ、土御門天皇への愛はうすれ、重子が生んだ守成への愛がいやましくていく――。

この守成を、伯母の猶子にしよう！

のちに承久の乱を起こしたことでわかるように、よきにつけ、あしきにつけ、決断が早く、行動の人であるのが、後鳥羽という人の性格である。

式子のもとにもたらされたのは、上皇の内意とはいえ、すでにそれは決定されたも同然であった。

そこで内旨ないしが下されてからこのかた、式子の家司けいしである藤原定家は、たびたび内裏に参

上して守成親王の陪膳（給仕）をしてきたし、大炊御門の邸では、邸内に親王を迎えるために、建物の修理や調度類の新調、庭の手入れなどなど、病床のあるじの看護よりも、むしろ親王をお迎えすることのほうに氣をとられていた。

守覚は今、その東宮猶子の内意の件にふれたのであった。

守覚はつづけて、

「東宮はいずれ帝位につかれる方。すると齋院は、女院号を戴かれて国母の位に着かれるお立場ではありませんか」

午後の陽ざしが翳（かげ）ってきた。庭内の樹木の枝をわたっていく、鳥の鳴き声がかきこえてくる。

鳴き声はやむとともに、寂として誰も口をひらくものはない。

ふたたび守覚は、

「そのお立場にある方が、民衆生と同じになつてしまわれて、いかにして衆生を導き、国

家と天皇家の繁栄に奉仕することができましようぞ。齋院のお心には、妄念（もうねん）が巣くつておりますぞ」

十二

守覚の横で、うなずきながらその諫言（かんげん）をきいていた亮子が、

「齋院、御室をお恨みしてはなりません。御室は心底、あなたの後世を心配しておられるのです。御室の仰せられること、すべて道理ではありませんか。これほど分かりきったことが、どうしてあなたには、分かつて頂けないのか」

亮子は深く嘆息して、

「あなたのところにはお耳に入っているかどうか知らないけれど、御室はこのところご心労が多くてね。御健康も実はすぐれないのです。近ごろ道法さんの態度に、目にあまるものが多いですよ。そんなところにあなたまでが御心労をおかけして」

亮子は話しているうちに涙がこみあげ、懷紙でぬぐうと小さく鼻をかんだ。

彼女がいま道法といったのは、後白河法皇の第八子で、守覚にとって十六歳下の異母弟である。

承安四年（一二七四）、九歳で兄守覚の禪室に入り、治承四年（一一八〇）、守覚を戒師にして十五歳で出家。以来、三十五歳の今日まで、守覚のもとで学び、守覚によって育てられ、そしてやがてこの異母兄のあとを継いで、仁和寺第七代御室に予定されている内親王であつた。

だが残念なことに、八百年後の今日にいたるまで、学徳すぐれた仁和寺中興の御室、と仰がれる守覚の横に置いてみると、人としての器うつわが小さすぎたのである。

だが道法はその小さな器に、並み以上の嫉妬心と野心だけは、十二分に持ち合わせていた。

若年のうちはまだよかったのである。

だが、次第に彼も三十歳に近づいてくると、同じ寺域内にいる守覚の存在を、目の上のこぶとして意識するようになっていった。

学問、聖教の面においても、後白河の二男対八男という出生順序の上においても、道法はつねに、自分を一段低くみる世間というものに傷ついてきた。

自分がこの異母兄に対して劣っているのを自覚するにつけ、面白くなかった。

その面白くない心が、逆に対抗心をたきつけ、貴族社会の中で目立った振舞いをして、前へ前へ出ていこうと彼をあおり立てる。

兄であり、かつ師父として、幼児から道法を見守り、育ててきた守覚であつたが、道法の振舞いが露骨になるにつけ、彼はそんな弟を好まなかった。

諫言は、火に油をそそぐ役しか果たさないのだ。

そんなことから、正治二年（一二〇〇）のこの当時、犬猿の仲とまではいかなくても、

仁和寺NO1とNO2の立場にいる二人の仲たがいは、貴族社会や仏教界のそこそこで囁かれる、公然の秘密になっていた。

しかし、そうでありながら、仁和寺とそれに連なる諸寺院の僧侶たちが、守覚派と道法派の二つに別れてしまわなかったのは、ひとえに、守覚の人となりの力であり、彼に寄せる、人々の信望の厚さを暗示するものといつてよい。

「女院」

亮子の涙まじりの嘆息を聞いて、守覚がそう呼びかけた。

「今、道法のこと仰せられますな。女院が今、仰せられましたように、われらは今、斎院の後世を氣遣わねばなりません」

守覚はそういうと、ふたたび式子に、

「斎院、われらはそろそろ寺に帰らねばなりません。再度申し上げますが、御自分のお立場を忘れ、斎院はわが身一つのことにかまけておられる。かかることで、どうして後世が

ありましようぞ」

そのとき、閉じていた目をひらいた式子は、やつれの目立つ視線で、しばらく姉と弟を見つめていたが、やがてふたたび目を閉ざすと、「はじめて法然さまにお会いしたとき」とその心を語りはじめた。

(つづく)

石丸晶子（いしまるあきこ）

東京生まれ、東京大学大学院人文科学研究所修了。現在東京経済大学教授。一九九一年、『式子内親王伝―面影びとは法然』で第一回紫式部文学賞を受賞。著書は他に、『法然の手紙』（人文書院）『お手紙から見る法然さま』（浄土宗出版室）『現代語訳蜻蛉日記』（朝日新聞社）など多数。

今月の表紙

唐蓮

蓮

LOTUS

9月

池の中に蓮華あり

大如車輪

青色には青光あり

黄色には黄光

赤色赤光

そして白色には白光ありて

微妙香潔なり

舍利弗よ

極楽国土には

かくの如くの

功德莊嚴が成就される

・

蓮華

この不可思議

たとえ七寶池八功德水なくとも

小さな泥田に

咲く

美しく咲いて

いる

君子の花

わが国では仏の花として敬遠されてきた蓮は、諸外国では吉祥の花としても親しまれてきました。特に中国では蓮を花十友では「浄友」、名花十二客の中では「静客」としてあげています。なかでも宋代の哲学者、周茂叔は「愛蓮説」の中で「予は独り、蓮の淤泥より出づるも染まず、中通じ外直く、蔓せず枝せず、香遠くして益々清く、(中略)蓮は花の君子たる者なり、(後略)」と詠んで、蓮の花を「花中の君子」と賛えています。また花好きの中国人は、古来、十代名花を選んできました。1987年の全国投票では、「蓮」は8番目選ばれています。

表紙写真と文

三浦功大

1942年 宮城県登米町生。蓮に関する総合誌「蓮の話」を毎年発行・責任編集(現在3号までに至る)していることをはじめ、展覧会、講演会、その他イベントなど精力的な活動を通じ、蓮を軸とした多くの文化人の結集を実現させ、注目を集めている。主な写真集、著書に「JAZZ in JAPAN 1963-1974」(西田書店)、「蓮の文華史」(カド創房)などがある。

圓光寺

盛岡

寺院紀行

撮影／夕力才力邦彦

文／真山剛

圓光寺山門。右手に鐘楼が見える



東北新幹線の終点、盛岡駅から車で五分、歩くとおよそ二十分の所に圓光寺はある。境内に隣接する御蔵は北上川に面している。

その圓光寺を訪れたのは、運が良いことにちょうど翌日に多くの檀信徒が集まる施餓鬼会を控えた日で、内陣と仏具の塗り直しが終わって、御本尊がよりまばゆくなっただけの日だった。

第三十一世加藤光順住職が快く出迎えてくれた。

さて、境内では何人もの檀信徒の皆さんが黙々と掃除をされているとこへ、この取材に合わせて総代さんも駆けつけてくれた。忙しい中、わざわざ仕事を抜け出して来てくれたのである。

総代さんは私たちに丁寧な挨拶をしてから内陣を見て開口一番、

「ああ、きれいになった。ご本尊さまも喜ぶし、みんなも喜びます」

本当に忙しい中を時間を割いてくれたその総代さんは、本堂内でひとしきり自分の菩提寺の特徴と魅力を話されると、すみませんと恐縮しつつ仕事に戻られた。その間およそ三十分だった。

総代さんは境内の掃除をする檀信徒に挨拶を交わしながら、急いで仕事に戻られて行ったが、その後ろ姿を見ながら、このお寺がいに檀信徒に大切にされているかを垣間見た気がした。

さて、紫雲山圓光寺は北上川に雫石川、中津川が合流する地点からすぐ下流の明治橋際に佇んでいる。盛岡の繁華街から少しははずれるが、町並みの中に入っている。



圓光寺に隣接する御蔵。新山河岸として栄えた頃の南部藩の米蔵だ

盛岡の町は南部藩が仙台の伊達政宗の脅威に備えて三戸から盛岡に居城を移し、その城下町として栄えた町である。城下町をつくるにあたり、いざというときの兵の集合場所や待機場所に早変わりできる寺院を、城の北と南に分けて配置している。その数は合わせて七十六か寺。

かなりの数である。しかし、もともと地元にあった古刹は数える程しかない。北と南の寺町は南部藩が領地内の各地から移転させた寺院と、新しく建立した寺院で成り立っている。

ただし圓光寺は移転寺院ではなく新寺として建立された寺院である。寛文元年（一六六一年から一六七〇年）に光台寺の第三世生蓮社良往上人一白和尚が創建した。光台寺は圓光寺の本寺にあたり、天正元年（一五七三）に盛岡に移転してきた寺院で、福島いわきの浄土宗名越派の総本山、専称寺の末寺である。

新寺として建立された圓光寺で特筆すべきは第八世良観上人（辨譽和尚）である。

良観上人は元禄年間の一六八八年から一七〇三年までの圓光寺住職で、その間に本堂、庫裡、山門、鐘樓を建立、後に船橋八景の一つに数えられる名鐘までも新鑄している。

上人が建立した伽藍の多くは、三百年以上経った今も残っている。火事の多かった江戸時代にもその難を逃れたのは珍しく、本堂は現

四幅からなる十六羅漢図



在、盛岡市で最も古い建築物となっている。

その本堂は寺院にしては珍しい合掌造りで、間口八間に対し奥行きが十間と縦長である。かつては内陣奥の左右約一間半は位牌堂として使っていたが、昭和十年第二十九世法譽真隆上人が本堂から廊下で続く別棟、位牌堂光明殿を建立してからは、その場所は本堂として使われている。それだけに実に奥行きのある本堂で、その広さ際だつ。

百万遍の大念珠が本尊を取り巻くようにかけてあるが、最低でも百五十人、できれば二百人でないと繰くれない大念珠繰りができるのは、それだけの人数が楽に車座になれるこの本堂ならではの。

山門は一説には左甚五郎作ともいわれるが、こちらも火災にも会わず、またいくどとなく溢れた北上川の水害にも耐えてきている。鐘楼建立も上人の時代で、後に船橋八景に数えられ、圓光寺の晩鐘として歌にも詠まれている。

また、本堂前に夫婦で聳える桂の古木も上人の時代に植樹されたもので、市の天然記念物になっている。年輪を重ねた夫婦桂樹はいまでは鬱蒼という言葉がびつたりな位の大木で、山門から見ると本堂を覆うように仲良く並んでいる。

さて、こうした伽藍建立を果たした良観上人だが、忘れてならないのは参道左手に残る首塚の由来である。



位牌堂の光明殿。先々代が造りかけたが、大きすぎると頭部だけでやめた仏像が祀られている



本尊裏にもへびのくわがはいてある
百万遍数珠



良観上人の時代であるから時は元禄。

当時城の奥女中だったお蓮の父、材木商の岩井与一郎がキリシタンということで処刑され、さらし首となった。

娘お蓮はそれを知って、いくら御法度で処刑されても、刑場に父の首がさらされていることに耐えられず、夜こっそりその首を盗みに行った。罪人の首を盗むのが罪であることは承知しながらも、お蓮は父の供養をしたい一心だったのである。

何とか見つからずに父の首を盗み出したお蓮は、今度は父の供養をしてもらうためにお寺を回った。夜更けゆえ門が閉まっている寺も多く、また開いていてもさらし首の供養となれば当然お咎めとなるだけに、お蓮の願いをきく寺もなかった。悲歎にくれたお蓮が最後に訪れたのがこの圓光寺である。

いたいけな娘の話を聞き、やはり死者の回向は和尚の勤めと圓光寺良観上人は自分にも難が及ぶのを覚悟で懇ろに弔った。ただし、近所の手前もあり、木魚などの鳴り物は使わなかったという。

翌日、さらし首が消えて大騒ぎになった所に、お蓮が自首をしてきた。お蓮は自らの処刑を覚悟に奉行所へ行き、父への思いを語り、弔ってくれた和尚に罪が及ばぬよう申し立てた。この話を聞いた南部第三十代藩主の行信公はお蓮の孝心と勇氣に感心して、お咎め無し。その上、側室とした。

小泉信三が米内光政を讃えた一文が光明殿に掛けられている

米内光政氏は盛岡の人
若くして海軍に入り進んで大將大臣に至り又内閣總理大臣となる 昭和二十年八月太平洋戦争の終局に際し 米内海軍大臣が一貫不動平和の聖断を奉じて克くわが国土と生民をその壊滅寸前に護つたことは 永く日本国民の忘れてはならぬところである 逝去十三年至誠沈勇のこの人今も世にあらばの感を新たに しつつこの文を撰ぶ
昭和三十五年十月
後進 小泉信三

ほどなくお蓮は行信公の子を身ごもる。そして男児をもうけたが、その子が第三十一代藩主恩公となったのである。これに伴い圓光寺は五十石を賜ることとなる。

また、お蓮は蓮の方となったあと、父の菩提を弔うために圓光寺に当時としては珍しい洋画と観音堂を寄進したといわれている。

この洋画は現存し、その作者も判明し美術書にも掲載される価値あるものである。

また、観音堂は九州の延岡から遷座された生目観音が祀られた。

この観音は市の指定文化財となり、また盛岡十一番の札所となっている。

この話は中興上人と仰がれる良観上人の信者や篤信者への想いを伝えるものだが、この上人の気持ちは脈々と伝わっている。

三百余年の間、改修などを重ね寺と檀信徒が一体となって伽藍を守り続けたのはもちろん、戦争などで供出した晩鐘を再三にわたり铸造し直している。近くでは百八煩惱に合わせて百八畳という大書院を建立したが、これも三部屋に仕切った時に同じ三十六畳となり、法事するとき三組の檀信徒が人数の多少に関わらず同じ大きな部屋を使えるようにという細やかな配慮である。

寺と檀信徒が一つに成るからこそ、寺門の興隆があることは言うまでもないが、冒頭に触れた内陣の改修などもそうだが、圓光寺は



圓光寺光明殿入口に祀られる米内光政奉賛会寄贈の薬師瑠璃光如来像

いつも檀信徒と二人三脚で来ている。

こうした幾星霜を重ねた伽藍の他に、圓光寺には多くの政治家を生んでいる岩手県を代表する一人、米内光政が眠る米内家の墓がある。米内光政は盛岡市の生まれで、明治、大正、昭和の激動期に海軍大将、海軍大臣、そして総理大臣を務めた人物である。

総理大臣を檀家さんに持つ寺は、当然だが限られる。

圓光寺にとって、米内家の墓、米内光政の墓は寺宝にも劣らないものである。

さて、米内光政はその清廉さから「無為にして成る」と讃えられ、人望篤く今もその人柄を偲んで圓光寺にはお参りの人が絶えない。

ここでその光内光政の人柄を忍ばせるエピソードを紹介しよう。

東京まで行った第二十九世の住職が総理大臣の米内さんの邸宅を尋ねた時のことである。田舎坊主の姿で訪れた住職を警備にあたっている人が怪しんだ。すると、それを部屋から見た米内さんが「これこれお通しもうせ」と言った。

ようやく邸内に入り、母屋へ向かう住職に、米内さんはわざわざ縁側に出ると、両手をついて頭を深々下げ「ようこそいらっしゃいました」と一言。

この話は第二十九世住職の弟子にあたる第三十世住職から聞いた話だが、まさに米内光政の人柄が滲み出る話である。



盛岡八幡宮に建てられている米内光政の銅像

圓光寺には米内光政に関わる仏像もある。

本堂から渡り廊下で続く位牌堂、光明殿の入口に祀られている薬師瑠璃光如来像がそれである。

これは米内光政から寄進されたものだ。しかし実際は米内光政奉賛会が夫人のコマ子さんが昭和十六年に他界した時に、夫人想いだった米内さんのためにと掘金し合って建立し、米内さんに贈ったものである。それを米内さんがお寺に寄進した形をとったものだという。戦争回避を訴え続け、戦後も日本の平和に全力を注いだ米内光政は日本の誇りであると同時に圓光寺の誇りでもあるのだ。

また、庶民宰相として親しまれた岩手出身の原敬の墓も圓光寺から程遠くない所にある。今も多くの政治家を輩出している岩手だが、岩手が輩出しているのは何も政治家だけではない。

石川琢木、宮澤賢治、新渡戸稲造、金田一京助、といった多くの文化人も輩出している。

旅行などで各地を回る時の楽しみはいくつかある。昨今のグルメブームでいえば郷土料理だろうが、同時にその土地の生んだ先人達の足跡を訪れるのも楽しみの一つだ。

そうした意味では圓光寺は間違いなく盛岡の“観光札所”に入る。山門、本堂、鐘楼、生目観音、夫婦桂樹、米内家墓苑、そして薬師瑠璃光如来像など。盛岡を訪れる時には是非立ち寄りたい名刹である。

(ルボライター)



圓光寺本尊の阿彌陀如来像は鎌倉時代の作だ

ポケット版

枕経通夜葬儀諸経偈文集

諸経偈集

こんな経本が
ほしかった

能化必携！

21世紀の経本遂に刊行！

プロが創った

プロフェッショナルのための経本。

緊急、不意の枕経に、お通夜に

能化のお通夜、葬儀のお焼香に

これさえあれば

出先からそのまま回れる。

3つのポイント

◇ポケット版という大きさ！

タテ15センチ、ヨコ8センチ、

厚さ1センチ

◇通夜、葬儀に必要な経文を、

最小限にすべて網羅！

◇経典は、すべて本字にて表記！

内容

廣懺悔

懺悔偈

初夜禮讃偈

佛說無量壽經數佛頌

佛說無量壽經四普偈

佛說觀無量壽經真身觀文

回向文

佛說阿彌陀經

一枚起請文

一紙小消息

發願文

脇導師作法

廣懺悔訓読

定価：2,000円(税込)

送料 1冊	180円
2冊	210円
3～5冊	310円
6～8冊	340円
9～11冊	380円



◀お申し込み先▶

ふじゅせん刊行会

〒141-0021 東京都品川区上大崎1-9-11 〈戒法寺内〉

TEL：03-3441-8971 FAX：03-3441-8702

郵便振替00150-8-158563 ふじゅせん刊行会

御法語に聞く

もしわれ申す念仏の様、風情ありて申し候わば、毎日六万遍のつとめむなしくなりて、三惡道におち候わん。

【聖光上人伝説の詞】

もし、私^がいかにも物知り顔で朗々とお念仏を称えるならば、毎日勤めている六万遍のお念仏は虚しいものとなつて、地獄・餓鬼・畜生に墮ちしてしまふでしょう。

自身を飾り立てるな　く自らへの戒めとしてく

「ご住職のお経は朗々としていい声ですね。」

お檀家さんのご葬儀やご法事などの後、参列者からそう言われることがあります。もちろん社交辞令でしょうが、自意識過剰の私などは口では謙遜しながらも、心の中では「そうさ、オレのお経だってまんざらではないだろう」とつい嘯いてしまうのです。

ところが先日、拙寺で一般信者の方とお念仏の会をお勤めしていると、急に声が出なくなりました。鼻風邪をこじらせ声が出にくいと思っただけなのですが、お勤めがお念仏から礼拝に移ったところで声がかすれだし、ついに咳き込んでしまいました。

礼拝は先導役と参加者が節の付いたお念仏をオウム返しに輪唱しながら交互に礼拝を繰り返すのが作法です。僧侶の私がお勤めの先導役を務めていましたが、その私の声が急に途絶えたものですから、あとの参加者は礼拝を続けていいのやら戸惑うばかりです。

一般の方に対し僧侶が常に念仏を先導しなければならない。そう考えていた私でしたが、声が出なくては仕方ありません。導師の

席から後ろを振り返り、しゃがれた声で「私の代わりに先導役の部
分もお称えして下さい」と頼み込みました。一般信者の方々が称え
るお念仏を頼りに、僧侶の私が声にならないお念仏を称えて礼拝す
る。はじめは何とも情けない気分でしたが、次第に「ああ、自分も
一人の信仰者に過ぎないのだ」と改めて実感されてきたのです。

阿弥陀さまは誰であつてもお念仏を称える者にこそ往生を叶える
とご本願にお誓いです。どんな立場の人でも、お念仏を称えさえす
れば往生いたします。たとえ声にならないお念仏であつたとしても、
往生に揺るはないと信ずれば応えて下さるのです。それを、いい声
でお念仏が称えられなければ僧侶として情けないだなんて、み仏の
本願を尊びもしない身の程知らずの愚かな思い違いでした。

法要儀式を執行する僧侶の立場では、確かに読経の声を鍛錬する
必要もあります。しかし念仏を称えるということは、僧侶であ
ろうとなかろうと、皆とともに極楽の世界へ往生しようと願うこと
であるはずです。私は一般の方のお念仏に先導される立場になつて

はじめて、念仏を称えてはいても僧侶という体面ばかりを気にしている自分がいることに気付かせていただきました。

法然上人はある時、お弟子の一人から「上人は智慧の優れた方であるから、上人のお念仏は私たちのお念仏より余程の功德があるものでしょうか」と尋ねられました。すると上人は即座にその言を否定なされ、続いて冒頭のお言葉をお示しになりました。

「極楽への往生を願う以外、いったい何のためにお念仏を称えるというか。自身の体面を飾り立てるためなら、何万遍念仏申したところで三悪道に堕ちるしかない」。声が戻った今、自分自身への戒めとして、冒頭のお言葉をこう受け取らせていただきました。

そろそろお彼岸です。仏壇やお墓に向かってお念仏を称える方々も増えましょう。どうか、習慣やしきたりとして称えるお念仏ではなく、いずれは自分もご先祖と同じ極楽浄土に往生したいと願うお念仏であってほしいものです。それがみ仏の本願に合う念仏であるはずなのです。

（浄土宗総合研究所 研究員 袖山榮輝）

東海道 五十三次を 歩いて (五)

原田 功

老いてなお
童の気持ちを持った仲間
四人で東海道を
歩きだした

7、川と橋

東海道は日本でも有数の川をいくつかわ渡る。「箱根八里は馬でも越すが越すに越されぬ大井川」と歌われたように、川はしばしば東海道の旅の障害になった。

私たちは川を渡るごとに昔の旅を想い、特別の期待を持ちながら渡ったのだった。しかし、現在の川は東海道の面影を全く残すことなく、車のためにのみ近代的な橋が懸けられている。有名な川の橋でありながら歩道はなく、トラックの行き交う橋の上を騒音と強風に怯えながら命懸けで渡る事もあった。

私たちは、川を渡る度に、昔の旅の情緒とは裏腹に、現在とはこういう世の中なんだという事を思い知らされることになった。

○旧相模川橋脚

間の宿茅ヶ崎を過ぎると間もなく十景坂（十間坂）を下る。ここに立つと、これまで

歩いた茅ヶ崎あたりは台地であって、これから行く台地の西側下は広大な相模川の氾濫原であった事がよく解る。ここからは広い田圃の彼方に相模川まで見渡せたものであろう。南湖と言われた平地である。

坂を下ると、道は大きく右に曲がり鳥井戸橋を渡る。橋のたもとに「南湖左富士」の大きな碑があり、碑の反対側に鶴峯神社の鳥居がある。その奥に参道が真っすぐに延びていて両側に松並木が続いている。その北は懷島。大庭一族ゆかりの土地である。相模川に近いこの土地は洪水にも見舞われたであろうが、肥沃な土地であったに違いない。

相模川は流路を様々に変えた。小出川もその一つで鎌倉時代は相模川だった。現在の相模川から一・五キロも東に離れている。東海道（国道一号線）が小出川を渡る橋の手前に「旧相模川橋脚」がある。

関東大震災の時、ここに鎌倉時代の旧相模川の橋脚が七本、によきによきと現われた。

旧相模川橋脚



源頼朝は、この橋ができた時、橋供養に参列した。その儀式が終わって帰る時落馬して、それがもとで死んだ。乗っていた馬も飛び込むようにして相模川に落ちて死んだという。平家の祟りが馬に乗り移ったのであろうか。このことから、この川は「馬入川」ともいう。七百年も経た今、橋脚が現われたのは深い深い因縁の現れだろうか。実に不思議である。

今、私たちは、頼朝が何かを感じながら見たであろうその同じ柱をこの目で見ている。水の上に頭をもたげているその柱をじっと見つめていると、鎌倉時代がそこにあり、権力者頼朝の不安そうな息遣いまで聞こえてくるように、薄気味悪くなってきた。

現在の相模川は平塚よりを流れている。国道一号線でもある馬入橋は、猛烈な風だった長いコンクリートの橋を、風に振り落とされないように欄干につかまりながらやつとの思いで渡り、平塚の宿に向かった。

○酒匂川

酒匂川は水がきれいである。丹沢、足柄から流れてくるこの川の川筋には大都會がないからである。今も鮎釣りのシーズンには釣り人で賑わう。水量も多く流れが速い。

昔からこの川は洪水が多かった。橋をなんべんも架けたが流されるので、橋を架けるのをやめ、歩行(かち)渡りになったそうである。

源頼朝の旗揚げの時、三浦一族は頼朝に加勢すべく軍勢を引きつれてここまで来た。しかし折からの増水のために小田原側に渡る事ができない。この川岸で何日も逗留することになった。そのうちに石橋山の敗戦を知り、むなしく引き返すことになった。川の流れは人の命運をも左右した。歴史も左右した。二宮尊徳が築いた堤防と松の並木が右岸に遥かに見える。尊徳はこの川と苦闘した。この苦闘の中で二宮尊徳は育った。「艱難汝を玉にす」である。

酒匂川河口より酒匂橋
左方小田原市街



思えばこの川も人間の歴史を様々に刻んだ川である。川は人間には何の関わりもなく気ままに流れるが、人間の方は川の流れに大いに関わって生きてきた。

広重が描いた「小田原」はこの酒匂川の歩行渡しの風景である。描いた場所は現在の国道一号線に架かる酒匂橋の東詰めの少し上流の川原あたりである。箱根の山が大きく聳え、山の下に小田原城も描かれている。川を渡れば小田原の宿だという事がよく解る。空気が実に清澄である。三キロメートル先までこのように見えたものであろう。今は小田原の町も城もビルに遮られ、箱根の山も霞んでいる。私たちはここで昼食を摂りたかった。河口が左に見えて、少し歩けば海に出られそうだった。行ってみると西湘バイパスに遮られて川にも海にも出られなかった。やむなく引き返して橋を渡り小田原側の岸辺に出ようとしたが高いガードレールに阻まれて川岸に出られない。道路は一体誰のために造られている

のだ」と言いたくなる。現代は川と人を殊更に引き離している。

しかたなく小田原に向って国道を歩き、道路脇の小さな神社を見つけて狭い境内でやっと弁当を広げることができた。日は西にだいぶ傾いていた。

○柿田川湧水と黄瀬川

三島を過ぎて一キロ程行った所に柿田川湧水がある。柿田川というのは地図で見ても突如として現われて、太く短く流れて狩野川に合流する。富士山の伏流水であることが解る。旧東海道筋ではないが、Sさんがぜひ見たいと言うので、国道に出て柿田川公園に寄り道をした。

柿田川湧水は何千年も前の富士山の雪解け水を今ここに湧出している。豊かで清冽な湧水が砂を巻き上げてこんこんと絶え間なく湧きだしている様は実に感動的である。自然の鼓動と言うべきか。地球が生きていることを

対面石



柿田川湧水



黄瀬川



富士川



間近に見る思いがする。

富士山や箱根が爆発したのはいつ頃の事であろうか。この辺は溶岩と火山灰で形成された土地である。三島にしても沼津にしても伏流水は豊富である。黄瀬川も富士箱根の水が流れこんでくる水量の豊かな川である。

黄瀬川と言えば、源頼朝と義経が初めて対面した場所として有名である。源平の話に有名な黄瀬川とはどんな所だろう、いつか訪ねて見たいものだと思っただけだ。

柿田川から程なく右側に長沢八幡宮がある。その境内に「対面石」というのがあった。頼朝が関東の武士を引きつれてこの黄瀬川のほとり八幡宮に陣地を張った。そこに奥州平泉からはるばる駆けつけた義経がたどりつき、感動的な対面をした。その時二人が座った石がこの対面石だというのである。大きいほうが頼朝、小さいほうが義経が座った石だという。黄瀬川に出てみると、水はきれいで豊かな流れであるが、さほどに大きな川ではなく、

何の変哲もない野の川である。対面石以外歴史を語る物は何ひとつない。どんなに栄えてもやがては消えて行く世の移ろいのはかなさをこの小さな流れは無表情に語っているように思われた。

○富士川

新幹線で新富士駅あたりを通ると、製紙工場の煙突から煙が流れその背景に雄大な富士を見ることが出来る。私たちはこの富士市の工場群を徒歩で抜けて富士川に至った。この辺は富士川の氾濫原で、最近まで広大な湿地帯だった。新しい工場地域である。工場用地に舗装道路が真直ぐに造られ、旧東海道はどこをどう通っていたのか解らない。新しい道路を迷いながらどうにか富士川にたどりついた。富士川は道中一番の急流だったという。河幅は水の増減によって一定せず、船渡しも命懸けだったそうだ。国道一号線の富士川橋の東詰め右側に水神社と渡船場跡がある。洪水

の時はこの水神の森が島のようになり、左右に氾濫したのだそうだ。富士市側は一面の湖のようになったに違いない。そこで人々は水神の巖を元にして長堤を築いた。それ以来富士市側の氾濫はなくなったという。暴れ川と人間の長い長い戦いであつた。この水神はその戦いの記念碑でもある。

富士川橋を渡る。なるほど流れは急である。広い川床に幾筋もの堰堤が築かれ、テトラポットが投げ捨てられたように無数に置かれ、急流に抵抗している。今でも洪水との戦いが続いているのだ。川の流れの情緒はなく、水と人間の戦いの修羅場である。

この橋も車優先で、大型車が橋を揺るがすようにブンブンと行き交い、人の道は一人分ぐらいしか幅がない。そこを自転車の高校生が何人も何人も強風に逆らつて五〇〇メートルの細道を通りすぎる。自転車の一団が通り過ぎるまで年寄四人は欄干に身を寄せて歩みを停める。

四人の話し声は大声でないと通じないが、欄干につかまつたKさんが、右後方を指差しながら何か大声で怒鳴っている。指差した方角に目をやると、曇り空の中に富士山が姿を見せていた。初めての富士山である。風と騒音の中で、Kさんは

「おい。富士山だよ」

と、怒鳴っていた。灰色の空に輪郭を見せた富士山の姿に、四人は子供のように、

「富士山だ。富士山だ」

と、叫び合っていた。

思えば田子の浦、左富士、鶴芝など、幾つもの富士の名所を通りながら一度も富士は姿を見せてくれなかった。待望の富士だった。

富士川橋を渡り切ると、急に静かになった。旧東海道はすぐに山道になり、間の宿岩淵に向かう。

○大井川

藤枝から島田までの道程は長い。しかも国



大井川
島田側の渡し場跡

大井川
川越遺跡



天竜川

道一号线を行くので、特別見るものもなく、つらい徒歩行だった。大井川はこの先だということだけを励みに埃と騒音の道を歩く。

大井川の一キロほど手前からやっと国道と分かれる。そこからは大井川越遺跡となる。川に近くなる程に川会所や旅籠・木賃宿などが昔のままを復元して並んでいる。川止めで人が溜まれば、相当の賑わいだったであろうが、今は家屋だけが復元されて、人は一人もいない。遺跡となっているが、廃墟を歩いているようで、異様な気分だった。ここを通り過ぎれば川、「越すに越されぬ大井川」である。道は堤防から川に潜りこむように無くなってしまう。

大雨の時はここの宿屋街で旅人は何日も何日も逗留を余儀なくされた。川越人足は六五〇人も待機していたというから、旅人の数は一〇〇〇人を優に越していたに違いない。この道でこの長屋の下で様々な人々が錯綜していた。女の嬌声、男の蜚声も入り乱れて様々

な人間模様が繰り広げられたことであろう。時代は過ぎ、人は世を去り、今は寂として人の声なく、形骸を残すのみである。

大井川は大きい川である。私がかれまで見た川では最も大きい川である。河川敷が途方もなく広い。増水してこの河川敷が全部水になるとしたら正に大河である。一〇〇〇メートルにも及ぶ大井川橋を渡りながら、右に左に広大な大井川をながめる。これまで大井川の写真や絵を見てはきたが、これだけの大きさを想像することはできなかった。この広さは写真や絵では表現できない。現にその場に立ってみなければ、大きさを把握することはできない。

この川までが駿河の国、川を渡れば遠江。日本を東西に分ける川でもあった。江戸を旅立った人たちは、この川を渡って金谷の宿に入り、さらに牧の原台地に登り、大きな大井川を眺めながら、他国に来たのだと悟り、はるばるとやってきたものだと思ったに違いない。

い。私たちも東京からおよそ二〇キロ、よくもまあ歩いてきたもんだとしばし感慨に耽る。

○天竜川

見付宿を過ぎると東海道は直角に南下する。曲がらずに真直ぐ行けば姫街道である。姫街道に入ったほうが天竜川まで直線に行けそうなので、私たちはその道をたどることにした。やがて国道一号線に合流し四キロ程で天竜川にたどり着いた。

天竜川には大きな橋が二つ並んでいた。新国道の新天竜川橋と旧国道の天竜川橋である。天竜川は昔は船渡しで、渡し場は今の橋の少し下流にあったそうだ。

二つも橋があるのにどちらも人のための歩道がない。逃げ場のない橋の上で車と同じ道を歩かなければならない。「新」の方が車が多そうなので、「旧」の方を渡ることにした。

一キロに近い天竜川橋は人も車も同じ面を通行する。人一人が通れるぐらいの白線が境界を示しているが、大型のトラックなどは白

線をぎりぎりに風を巻きおこして通り過ぎる。私たちは何度も身を竦めて欄干につかまった。ブワン！ブワン！という轟音と排気ガス。こんな恐ろしさは戦争の日以来体験しなかった。ひたすら向こう岸にたどり着くことを念じて走るようにして渡る。この時間は十五分ぐらいたったと思うが、長い長い時間だった。

やっと浜松側の岸にたどり着き、昔の船着場あたりにおいてみる。ここへ来て初めて天竜川をゆつたりと眺めることができた。地獄のような橋の上と裏腹に、水はきれいである。青青として水量も豊かである。多摩川や相模川よりきれいだ。この川は明石山脈と木曾山脈の水を集めて流れる大河である。おだやかで平和な流れであるが、一度伊那盆地に大雨がふればたちまち泥水の奔流となる。

それにしてもこの車の流れの恐ろしさよ。自然の恐ろしさには威厳を感じ、従容としてそれに従う気にもなるが、人間の造ったこの恐ろしさにはただただ憎しみだけが募る。機械文明は敵だ。

(つづく)

記 時 歳 教 仏

古き伝統技 三代にわたる信頼

浄土宗法衣専門

有限
会社

古島法衣店

〒111-0041

東京都台東区元浅草4の2の1
電話(03)384211289
振替0018012145231

彼岸は此岸(現世)へ彼岸(悟りの世界)の仏たちを迎えて祈りと感謝のための響応をする行事です。

故ありてあづかる位牌秋彼岸

亀田目庭

意味深な句です。「誰にも言えぬ仏があつて秋の(春の)彼岸まわり道」であつたか俗句がありますが、背後に人生のドラマを感じさせる。墓所や位牌のようにはつきりした「預りもの」

ではなくても、誰にも一つや二つ他人には説明できない生と死を抱えているものです。

秋彼岸詣り合はせてみな親し

深見けん二

一転して我も他も天地もみな同じという感覚の句です。亡き人进行先祖を敬う気持はみな一緒、たまたま詣り合わせた人々は親しげに語り合います。ゆたかさゆとりが感じとれます。

秋彼岸

秋彼岸袂ひろげて飛ぶ雀

川崎展宏

雀に寄せて感謝の気持ちをおおらかに謳っています。

ひろびろとした天地に、のびのびと翼を広げた飛翔。

広い世界に遊ぶ感覚です。

風もなき秋の彼岸の綿帽子

鬼貫

秋彼岸、もの思う季節。静かに豊かな時間を過しましょう。

FORUM
浄土の広場

「浄土の広場」では
読者の自由な参加をお待ちしています。
詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、
TVウオッチング、紀行文、その他創作等。
あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

真壁保育園・園児の句集

「はいく」第八号より抜粋

(選・編集部)

四歳児

ぼくのゆめたくさんあつてきまらない

柿沼賢人

ふうせんはどこにいくのかゆらゆらと

沼田静紅

そらのくもいろんなかたちおもしろい

青木理紗

うちゅうへあんばいまんまとびたいな

小川雄基

ぶらんこはたくさんこぐとすずしいよ

泉 拓弥

あめあがりくものすみからにじのはし

根本つかさ

ながれぼしいつになったらみれるかな

潮田彩花

クレヨンのいろみたいだねはなばたけ

富田 希

そとにでてちょうちよみたいにとびたいな

小林未歩

とべるならいつてみたいなくものうえ
きらきらとひかりかがやくなみしぶき

五歳児

みんなのでつないでみたらあつたかい
ただいまとパパがかえるとわらいごえ
ミンミンとせみさんたちのおんがくか
なんでかなはやくおきれるにちようび
ひまわりがきれいにさいたよあついなつ
あかさたなおもしろいけどなんでかな
やまのなかどろぼうみそうこわいんだ
えんぴつはおとなになるととんがりだ
おほしさまいつもぴかぴかまんげつだ

増渕有沙

樋口玲菜

清水加菜子

細谷莉沙

沼口省吾

安田祥大

沼尻孝啓

岩渕吉訓

小林由佳

桜井一樹

告 和樹

茨城県真壁郡真壁町

園長 長谷川君子

浄土誌上句会

●朝顔

〔特選〕朝顔に海描き足してゐる児かな 池田伊吹

●写生だろうか。朝顔を描いたあとで海をき足している。その海は現実に見えているだろうか。ひよつとすると海辺に育った子にとって無意識の仕業かも知れない。これ添えることとて心足るのであらう。

〔佳作〕朝顔の蔓の先なる海の紺

河合富美江

朝顔や鉢が狭める露地の奥

細田初枝

朝顔の売り切れてゐる鬼子母神

富田良子

●夕立

〔特選〕夕立のくるらしき風たちはじむ 山本美代子

●黒い雲が次第に広がってくる。少し出てきた風に、夕立の来るのを知らせているよく気配が感じられる。自然の何とない動きを皮

増田河郎子・選

膚感覚でとらえているのは、やはり日本だからなのだろう。

〔佳作〕夕立に裾気遣ひつ妻帰る

大場 清

夕立や仕舞ひ忘れし小屋のもの

金子節子

夕立に止められてゐる通夜の軒

増田信子

自由題

〔特選〕紫陽花や陣取りづつこまた明日

別役玲子

●陣取りごっこに時間を忘れていて、多分誰かの親が迎えに来たのだろう。明日を約してちりぢりに別れて行く。その時の言葉のままに表現しているのが、いかにも子等らしさ出していると思う。

〔佳作〕沈黙の夏ひとりづつ家を出る

四方 遵

鈴鳴りの梅神苑の昼深し

島谷とき

チリチリと氷のひびや梅酒注ぐ

小久保あき

朝顔

朝顔の江戸紫や朝の涼

朝顔やにわか雨あと色揃ふ

朝顔の売り切れてゐる鬼子母神

朝顔に筆先なじむ経机

朝顔が支柱まさぐる蔓の先

大輪の朝顔に見送られ登校す

夕立

大夕立露店たちまち荷をまとむ

夕立の音やりすこす甘味茶屋

夕立過ぎ人あわあわと街にわく

夕立に裾気遣ひつ妻帰る

夕立や街に幾つかどんづまり

夕立のくるらし坂の写真館

中島一子

大場清

富田良子

河合富美江

細田初枝

山本美代子

細田初枝

河合富美江

山本美代子

大場清

齋藤亮吉

玉屋麻衣子

夕立の終れば朱の画布空一面

四方遼

自由題

幻聴にあらねば幼き雨がえる

花好きの母が手植えし花みずき

里山にひっそりおわす磨崖仏

衣更てまろき言葉のおのずから

山本美代子

山田瑞邦

中島一子

河合富美江

晩夏の名句

日ぐらしや急に明るき湖の方

水中になお水はじく水蜜桃

朝日匂ふ卓へ濡れ手で出すトマト

梅を干す真昼小さな母の音

漢籍を曝して父の在るごとし

岸の灯に浮きては闇へ去る水母

夕顔や今日は言葉の多かりき

瓜きぎむ女のひと世刻むごと

門入りに重き西瓜を抱きなほす

ダリヤ切る生涯の妻の足太し

桶の茄子ごとく水をはじきけり

小林一茶

桂信子

金子篤子

飯田龍太

上田五千石

秋光泉児

福田夢汀

渡辺千枝子

篠田悌二郎

清水基吉

原石鼎

石橋秀野

第十回
浄土誌上句会の
お知らせ

季節

林檎

虫

自由題

締切・九月二十日
発表・『浄土』十一月号

選者・増田河郎子(『南風』主宰)

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各一名・佳作各三名

●葉書に俳句(何句でも可)と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0001 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

ばずる まちがいがし

答えは46ページにあります。

声はすれども姿は見えず。
アオマツムシは、どこにいる？
まちがいは7カ所あります。



イラスト・藤井ひろし

BOOK

the 法然

おそれおおくも、というべきか。元祖大師の御名前を冠したグラフィック雑誌風書籍。モダンなセンスにあふれた編集内容で写真が素晴らしく美しい。

『清貧の思想』の著者中野孝二さんのエッセイ「墓を作った話」は興味深く読ませてもらった。インタビューを中心に置いてそれぞれの人物の造型が浮き彫りになり、バラエティに富んだ構成である。

特集「ラジオ、やさしいメディア」は懐しく戦前戦後の日本を思い出すきっかけになる。

読み終えて「癒し」という言葉を思い出した。良書である。配本が少ないので書店に注文をしてほしいとのこと。是非読んでもらいたい珠玉の一冊である。

浄土宗報恩明照会編・西田書店刊

一、〇〇〇円

編集後記

秋蟬の声そむなしく野原かな 岱潤

「国旗、国家法案」がわずか十二日間の国会審議であつたという間に成立してしまつた。

今年三月広島県内の高校の校長先生の自殺を機会に、一気に国旗、国家の法制化という運動が起きた。学校や、公的な行事での国旗、国歌斉唱に法的裏付けをつけ、強制力を増すためのものというが、前々から法制化したいと思つていた人々の思いが一気に爆発した形で、ほとんど審議らしい審議もせず、国民の意見が二分しているというマスコミ報道など目にもかけない、あつとい

う間の出来事であつた。

「天皇の国として永遠に続く」と歌いあげる『君が代』を国歌と決めることに、もう少しは国民的同意が必要であつたのではないかと思う。

権威や象徴は、上から頭ごなしに決められ押しつけられても、反発をうみ行き渡らないだろう。さまざまな角度からの賞賛の中で権威は育ち、時間の経過の中で象徴は顕在化してくるよう

に思う。性急な上からの決定は、何かそれに隠れた裏の思惑があるのではないだろうかと思つたりもしてしまふ。

(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川代潤

齋藤晃道

村田洋一

佐山哲郎

間川彰道

編集顧問

大室了皓

浄土
額価六百元

六十五巻九月号

年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷——平成十一年八月七日

発行——平成十一年九月一日

発行人——真野龍海

編集人——宮林昭彦

印刷所——株式会社
シータイイー

〒一〇五〇〇一一

東京都港区芝公園四一七一四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話〇三(三五七八)六九四七

FAX〇三(三五七八)七〇三六

振替〇〇一八〇一八二一八七



道路工事中



消火器



歩行者横断禁止



火気厳禁



止まれ



落下物注意



近隣静かに



落下注意



トラック注意



出口



落下注意



安心と安全をお届けするのは、
このマークです。



禁煙



ガラス厳禁



安全マーク



児童注意



ゴミ厳禁

ここにあるマークの意味、わかりますか？暮らしの中には、注意を呼びかけるマークが、ほんと、たくさんあるんですね。生活のいろんな場面で、みんなが注意し合って、ルールを守っている。だからこそ、私たちは毎日を穏やかに、安らかに過ごせます。でも、万が一のときのために、覚えておいて頂きたいマークがあります。それは、あなたに安心と安全をお届けする、このマークです。保険のことは、あなたの街にある住友海上代理店へ。

安心と安全をお届けする



住友海上

〒104-8252 東京都中央区新川2-27-2 TEL:03-3297-1111 (大代表)

『浄土』特選頒布会

ご注文・お問い合わせは法然上人鑑仰会まで。

【水晶数珠】

電話：03-3759-7074

FAX：03-3759-6323

【布教額・選択集十六章之図】

電話：03-3578-6947

FAX：03-3578-7036

肌身はなさず、
仏さまの御加護を

水晶
数珠



水晶腕念珠

- 水晶腕念珠 ① 6ミリ珠・M(16センチ)2,200円
② 6ミリ珠・L(18センチ)2,500円

- 水晶数珠 ③ 6ミリ珠・M(16センチ)2,200円
ブレスレット ④ 6ミリ珠・L(18センチ)2,500円
⑤ 8ミリ珠・M(16センチ)2,700円
⑥ 8ミリ珠・L(18センチ)3,000円

- ・申し込からお届までおよそ3週間です。
- ・送料は一個口あたり300円です。また別途消費税がかかります。
- ・支払いは商品のお届時の代金引き替えます。
- ・商品の品質に関しては万全を期しておりますが、配送時の事故、不良品、誤配送などについては送料当方負担でお取り替えいたします。



水晶数珠ブレスレット



仏壇用宗旨布教額
家庭の仏壇にぴったりの布教額です

大(320×183ミリ)
1,260円(送料別)
小(273×142ミリ)
480円(送料別)

平成11年6月より頒布価格が変わりました

選択集十六章之図
選択本願念仏集を絵で解きました

豪華額装入り(585×465ミリ)
20,000円(税・送料別)解説書入り
(お届まで4週間かかります)

